

#### 1-4 大正前期（昭和初期）の宝石類と宝飾素材

宝飾文化史にとっても宝飾産業史にとっても宝石の歴史は重要な研究分野である。だがどういふ訳か、日本では、宝石を科学的に分析する「宝石学」は盛んだが、宝石を歴史的に観察する「日本宝石史」は、真珠以外ほとんど発達していない。

ここでは、大正前期から昭和初期まで用いられていた主な宝石類と宝飾素材について取り上げる。これらの多くは昭和初期まで用いられた。

ダイヤモンド、真珠、さんご、水晶、めのうについてはすでに説明した。ここではそれら以外について見ていく。

取り上げた宝石を使った製品がカタログや広告にある場合はその図も示す。実際の製品（類似のものを含む）が現存するものについては1-6以下で紹介する。なお、明治から用いられている宝石類や宝飾素材については『日本の宝飾文化史』で詳しく説明してあるのと同書も参考のこと。

#### ルビー、合成ルビー、サファイア

ルビーは明治期からダイヤモンドに次いで人気の高い宝石。すでに明治二十〜三十年代には有力宝石商で取り扱っている。大正時代以降もその人気は継続し、7月の誕生石（図1-2-9）になっただが、天然のルビーは少なく、多くは合成石（当時は「合成宝石」と呼ばれた）だった。

例えば、大正四年に刊行された『天賞堂営業案内―貴金属装身具之部』（第八版）を見るとダイヤモンドや真珠の指輪とともに18金製ルビーの指輪が紹介されている（図1-4-1）。

この大きめのルビーの指輪は12円。それに対し、このカタログにはルビーより小さめのダイヤの指輪が150円と出ている。だがルビーは当時も高価な宝石であり、ルビーとダイヤにこれほどの価格差があったとは考えにくい。価格の点から見るとこれらは合成ルビーであった可能性が高い。



図 1-4-2  
色サファイアの指輪  
天賞堂  
大正 4 年 4 月『天賞堂営業  
案内—貴金属装身具之部』  
より

サファイアはルビーとともに人気の高い宝石で 9 月の誕生石 (図 1-2-9)。  
赤色以外のコランダム (鋼玉石) はすべてサファイア (当時は「サファ」とも表記) というが、サファイアには青色 (ブルーサファイア) の他にいろいろな色があった。  
図 1-4-2 の「色サファ」(12 円) は、おそらくブルーサファイアと思われる。図 1-4-3 の「白サファ」とは無色のサファイア。当時、無色のサファイアはダイヤモンドの代替品として使われることが多かったので、これもそのように使われたのだろう。  
これらのサファイアが天然宝石なのか合成石なのかは定かでないが、サファイアはルビーに比較して大きな石の産出が多く価格も安かった『寶石學』。従ってこれらのサファイアは天然宝石だったと思われる。



図 1-4-1  
ルビーと表示された指輪  
天賞堂  
大正 4 年 4 月『天賞堂営業案  
内—貴金属装身具之部』より  
おそらく合成だろう。



図 1-4-3  
白サファイアの指輪  
天賞堂  
大正4年4月『天賞堂営業  
案内—貴金属装身具之部』  
より

### エメラルド

エメラルド（「エムロ」とも呼ばれた）も明治後期から日本に入ってきている宝石で5月の誕生石（図1-2-9）。大正期にも丸嘉や白牡丹本店などの有力宝飾店では、ダイヤモンドとともに高級宝石として積極的に取り扱っていた（図1-4-4）。

しかし、大きな石は少なく、また品質のバラつきが大きく、価格にも幅があった。『寶石誌』では大正五年時点で1カラット25円〜500円と大きく差があった、高品質のものはダイヤモンドと同じ、もしくはダイヤモンド以上の価値があったと記している。

『宝石百年』（第二部）によると当時、天然色石は東洋の宝石商によって日本に持ち込まれたが、エメラルドの良質なものの多くは欧米に輸出されて、日本にはあまり来なかった。あったとしても色が濃く、深みを欠いた白濁の品が多かったという。ある程度の品質のエメラルドが比較的多く輸入され、装身具に使われるようになるのは昭和初期になってからである。



図 1-4-4  
ダイヤモンドとエメラルド広告  
白牡丹本店  
大正2年9月『婦人世界』より

(コラム1-13)

### 大正初期のルビー、エメラルド事情

この時代のルビーとエメラルドにつき、三越では自店の製品目録で宝石指輪について次のように説明している。

「寶石はダイヤモンドが多く、之については眞珠でありま  
す」(中略)「ダイヤ、眞珠に次いでルビーであります。ル  
ビーも大分等級がございますので、其上等なるものは、中々  
の高價なものもございますが、イミテーション(模造石)の

技術の進歩にしたが、大部分イミテーションを用ゐて居る場  
合もあります。この目録に圖解せられたる指輪には、佛國製  
のイミテーションを用ゐます。エメラルドも結構なるものな

れども、品物が佛底でふつてございます故、皆様の需要に應ずるこ  
との出来ないのは遺憾至極であります」(大正二年『三越タイ  
ムス』第十一卷第九号臨時増刊附録)。

良心的な説明である。このコメントによりルビー、エメラ  
ルドは、三越ですら天然宝石でないものを用いていたことが  
分かる。だがここでは模造石(イミテーション)と合成石と  
の区別がされていない。ルビーが模造石となっているが、こ  
れは合成石だろう。

### 模造エメラルド

大正五年頃には、上部は天然エメラルドだが下部は緑色のガラス  
という貼り合わせ(ダブレット)の模造石も国内に入っていた(『寶  
石誌』)。

また国内では「舶来エムロ」と称して自動車の後尾ランプの緑色  
ガラスを利用した模造エメラルドも作られた。この模造エメラルド  
は原価の四十倍という法外な値で売られていたという(『宝石百年』  
(第二部))。こうした模造石が多かったことも天然のエメラルドが  
あまり普及しなかった理由かもしれない。

だが、方形の小さな角形カットのエメラルド(カリブル)は割合  
豊富で、この石を使った指輪などは少なくなかった。

### アクワマリン

エメラルドと同じベリル族の宝石であるアクワマリンの製品も少

量ではあろうが、すでに日本で売られていた(図1-4-5)。ただし、エメラルドと比べると価格は安く、1カラットで2円ないし30円ぐらいだった(『寶石誌』)。



図1-4-5  
アクワマリン指輪  
丸屋商店  
大正4年11月『婦人世界』より

### オパール(蛋白石)たんぱくせき

オパールも日本人が大変に好んだ色石で10月の誕生石(図1-2-9)(当時は「オツパール」と原語発音に近く表記されることも多かった)。すでに明治三十年前後から普及し始め、大正と昭和初期と盛んに用いられた(図1-4-6)。

明治四十年頃には国産(福島県の宝坂産)のオパールを販売する東京宝石株式会社という会社もあった(『日本の宝飾文化史』9A-9)。

明治期には一部スロバキア産の通称ハンガリアン・オパールもあったが、大正期のものはほぼすべてオーストラリア産で乳白色のホワイトオパールだった。

オパールはヨーロッパでは一時、不吉をもたらす石ともいわれたが、日本ではそういった影響はまったくなく、比較的安価であったこともあり「下町階級の人々の間にまでこのオパールが大いに愛好されて、数量的にいつてもこの石ほどに普及されたものはなかった」。だが「不透明、乳白色のものが多いために、人気を失って(中略)昭和初期にメキシコ産のすばらしい石が来るまで、オパールの人気は中々回復しなかった」(『宝石百年』(第二部))。「メキシコ産のすばらしい石」とはファイアオパールのことだろう。

オーストラリアからどのように日本に運ばれたか。その多くは正規の輸入ではなく、船員が大きな原石の塊を持ち込んでいたといわれる。

オパールはたくさん用いられたはずだが、破損しやすい宝石であるためか、今日に残っているものはそれほど多くはない。



図 1-4-6

オパール指環

天賞堂

大正4年4月『天賞堂営業

案内—貴金属装身具之部』

より

## ひすい

ひすい（ジェイダイト—硬玉）は誤解されることが多い宝石である。古代に勾玉などに使われたヒスイが再び登場するのは明治四十年前後から。最初は玉簪や根掛（日本髪を束ねたところに掛ける飾り）に用いられた。

大正期になるとひすい人気は増々高まり、さんご人気を凌ぐほどだった。ひすいは玉簪に、根掛の玉に、帯留に、そしてこの時代に発達した束髪用の簪に盛んに用いられた（図1-4-7）。また、良質なものは指輪にも用いられた（図1-4-8）。

しかし、大正期のひすいは現在の私たちが思い浮かべる冴えたグリーンろうかんの琅玕質のものはごく一部で、多くは「緑又は白又は白地に緑を交えたもの」だった（『日本囊物史』）。琅玕質のひすいが流行の主流になるのは昭和初期からである。

なお、明治期の彫刻の帯留は、清朝（中国）の貴族が使っていた装身具をそのまま帯留に転用していたが、大正期頃からは日本人が彫刻したものを徐々に用いられるようになった。



図 1-4-8

ひすい指輪

天賞堂

大正 4 年 4 月『天賞堂  
営業案内—貴金属装  
身具之部』より

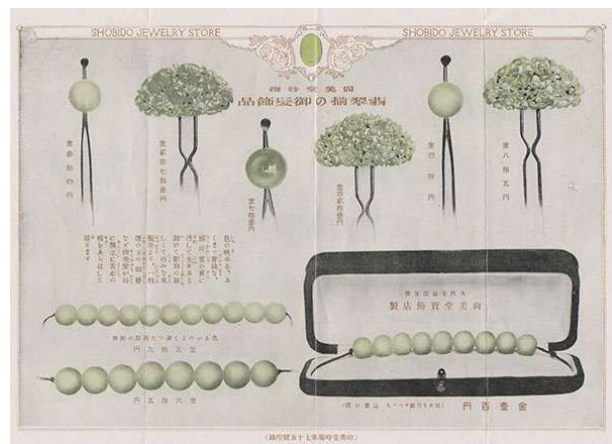


図 1-4-7

ひすい髪飾り

尚美堂

大正 6 年 3 月『尚美堂時報』第 75 号付録より  
玉簪、束髪簪、根掛。

### トパーズ（黄玉、黄宝石）

おうぎよく

トパーズは日本でも明治前期から滋賀県や岐阜県から産出。しかし黄色は稀で無色、淡青、淡紅などが多く、無色のものはブリリアントカットに研磨されダイヤモンドの代用品とされた。

大正期には、11月の誕生石として（図 1-2-9）外国産の黄色のものが用いられたようだ。紅色のものは高価だったが、無色または濃黄色のものは安価で 1カラット 5 円は超えない（『寶石誌』）。

### ガーネット（柘榴石）

ざくろいし

ガーネットにはいろいろな色があるが、明治期から日本人が好んだのは赤色の宝石で、良質なガーネットは、しばしばルビーとして売られた。

大正期以降も 1 月の誕生石として使われたが（図 1-2-9）、濃血

赤色の、あまり美しくないガーネットも多く、これらはかなり安価だった（『寶石誌』）。

### ムーンストーン（月長石）

ムーンストーンは日本では明治中期から用いられた宝石。大正期にも指輪などに使われ、『寶石誌』によると、優良品でもカラットあたり「六円乃至十円」と比較的安価。この宝石はカボションや球状に研磨すると真珠のような光沢を見せる。そのため真珠と共に6月の誕生石とされている。ただし三越の「十二ヶ月指輪」では8月の誕生石となっている（図1-2-9）。

### トルコ石（土耳其石）

トルコ石（ターコイズ）の石名は、イラン産のトルコ石がトルコ経由でヨーロッパに入ったことに由来。

大正期には12月の誕生石として（図1-2-9）日本にも入っていたようだが「土耳其（古）玉は皆小にして貴し、従て之を偽造することが多かつた（『寶石誌』）。三越の「十二ヶ月指輪」でも「イミテーション」となっている。

当時の模造石が多かつたものは骨や牙の化石を着色したものでフランスで作られたボーン・ターコイズ（和名は「骨トルコ石」「齒トルコ石」）。

おそらく日本で大正前期に用いられたトルコ石の多くもこれに類する模造石だったと思われる。

### キャッツ・アイ

キャッツ・アイと表記された宝石は明治二十九年の天賞堂広告に初めて見える宝石だが、尚美堂も大正初期に扱っていて価格は10円とある（図1-4-9）。

クリソベリル・キャッツ・アイなのだろうが、『寶石誌』によると、日本の上流社会でも貴重視され、透明の良品なら、1カラット200円以上するというから、ここに出ている10円というのはいかにも安い。たとえこの石がクリソベリル・キャッツ・アイだとしても、品質は良くなかったと考えてよさそうだ。



図 1-4-9  
キャッツ・アイ指環  
尚美堂  
大正2年1月『尚美堂新  
品録』より

### 紅編めのう（サードオニックス）

この宝石を使った製品は見当たらないが—この章の「誕生石指輪、初登場」で触れたように—御木本真珠店が大正五年12月に発行した『真珠』No.22には8月の誕生石としてルース（裸石）を紹介している。

とすると御木本では、製品の販売もしていたのだろう。

### 橄欖石（ペリドット） かんらんせき

ヨーロッパでは盛んに用いられた宝石で、日本でも第一次大戦（1914～18）後は「シベリア西比利亜方面から多量の優良石の輸入があった、指環、帯止等に嵌入せられて市中の宝石店の軒頭に現はる事が多くなって居た」。ただし、実際に検査をすると真の橄欖石に属するものは比較的少数であったという（『寶石學』）。なお、「誕生石指輪、初登場」でも触れたように、御木本では早くから8月の誕生石として用いていたようだ。

当時は濃緑色を帯びるものをペリドット、黄緑色のものをオリビン、淡黄緑ないし黄金色のものをクリソライトと称した。このように橄欖石は色の具合によって三様の宝石名で呼ばれていたが、現在では黄緑色のものをペリドットと呼ぶようになり、クリソライトは他の緑色石と混同されるため使われなくなった。オリビンの名称は宝石名としては用いられず、鉱物名として使用されている。

では、クリソライトやオリビンの呼称はいつ頃まで用いられていたのだろうか。

『寶石學』によると、これらの呼称は昭和戦後まで続いていたようだ。クリソライトはクリソベリル（金緑石）の別名として、オリビンは鉱物名ではなく宝石名として使われていた。

オリビンについては大正後期末の服部時計店でも売っているので紹介しておく。



(※JC誌掲載後付加)  
オリビン指環（プラチナ、ダイヤ入り）  
服部時計店  
大正15年6月『装身具』  
No. 51より  
高級品として売られている。

### 玉髓ぎよくすい（カルセドニー）

潜晶質石英の総称で半透明石として産出。日本でも各地で産出し、島根県の出雲地方いずもからは濃青色（濃い緑色）の碧玉「出雲石」（「青めのう」とも呼ばれる）が産する他、佐渡（新潟県）の赤玉石などがある。玉髓の多くは安価な帯留などの石として用いられた。

### クリソフレーズ（着色カルセドニー）

宝石に詳しい人でも、クリソプレーズ（Chrysoptase—天然カルセドニー）なら聞いたことがあっても「クリソフレーズ（Chrysophrase）」というのは初めてという人も多いだろう。

クリソフレーズとはクロムの化合物で緑色に着色したカルセドニーで略して「クリソ」とも呼ばれる一種の模造石。生産地はドイツ・イーダーオーバーシュタインで、大正初期に輸入され（「鏝のあゆみ」④）大正四〜九年頃日本でも流行した。

図1-4-10はその広告。だが「クリソプラス」となっている。クリソプレーズの英語を日本語読みしたのでこう表記したのである。クリソフレーズは昭和七年頃には良質なものが甲府でも作られている（『水晶宝飾史』）。

なお、クリソプレーズは「人工着色クリソプレーズ」と表記されることもある（「鏝のあゆみ」⑤）。



図 1-4-10  
クリソプラス（クリソフレーズ）帯留  
丸屋商店  
大正4年11月『婦人画報』より

### ブラッドストーン（血石）けっせき

ブラッドストーンは明治期から男性用指輪に用いられた宝石で、濃緑色のジャスパー（不透明潜晶質石英）の地に血赤色の小斑点はんがある。

大正期には3月の誕生石として主に安価な指輪に用いられた（図1-2-9）。

### ピーシー（ピンク・トルマリン）

ピーシーとは中国名の璧璽、碧晒（または碧沙）に由来するピンク・トルマリンないし、レッド・トルマリン（ルベライト）のこと（『寶石誌』『寶石學』他）。

この宝石は大正五年頃には日本へもたらされ、ピーシーの名称で、昭和の戦後まで使われた。紅色のピンク・トルマリンはこれまでの日本には見られなかった石で、若い女性を中心に簪の玉や帯留の石として流行した（図1-4-11）。

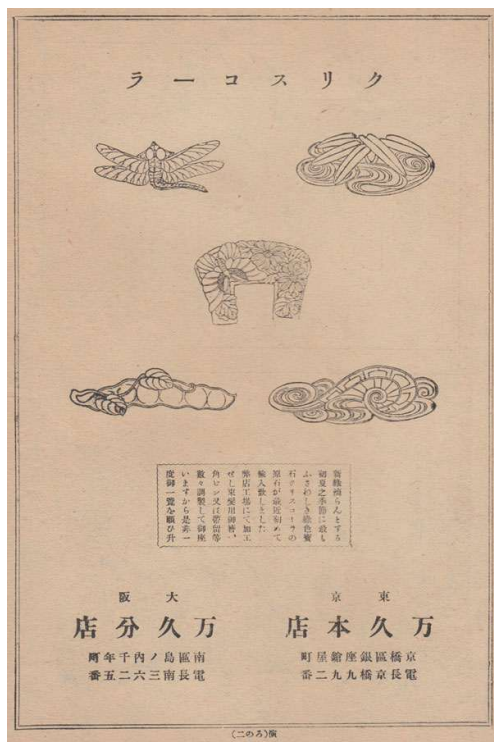


図 1-4-12  
クリソコーラ広告  
万久本店、分店  
大正 8 年 6 月『演芸画報』より

クリソコーラ（珪孔雀石）  
クリソコーラは青く青緑色の珪酸銅の鉱物で、マラカイトに一見似るために和名を珪孔雀石という。大正八年頃には「クリソコーラ」と称して束髪櫛や帯留に彫刻したものが用いられた（図 1-4-12）。『寶石學』にも「往々各種の装飾品に彫刻せらる」とある。

孔雀石（マラカイト）  
孔雀石は濃淡のある緑色の縞目状の鉱物で、国内でも産出する。明治中期から丸玉にして玉簪に用いられていた（『日本の宝飾文化史』8C-5）。  
大正期にも同様に玉簪の玉として用いられていた。また大正期には彫刻を施して帯留にも使われたようだが、欠けやすいためか現在に伝わる帯留は少ない。



図 1-4-11  
ピーシー広告  
万久商店  
大正 7 年 7 月『新演芸』より  
原石でも輸入され、国内加工品（内地加工品）の他、中国で加工されたもの（支那加工品）もあった。

### 紫水晶（アメシスト）

紫色の水晶は、日本では明治時代後期から和装の玉簪や根掛の玉に使われていた『日本の宝飾文化史』9B-8)。磐城（宮城県南部と福島県東部）、越後（佐渡を除く新潟県）、羽後（秋田県と山形県の一部）、加賀（石川県の一部）、下野（栃木県）、伯耆（鳥取県の一部）などで産出する（『寶石誌』）。

日本人は古来、紫色を高貴な色として珍重するためこの石は他の水晶より高価である。

2月の誕生石（図1-2-9）だったが、大正初期の甲府は極度の原石難の状態だった。ブラジル産の紫水晶が輸入されたのは大正七（八年頃）から。多く使われ出したのは大正期末から（1-2，地場産業動向②）。

### 黄水晶（シトリン）

黄水晶は日本では産出しない。日本で黄水晶が用いられるのは大正前期末の大正七（八年頃）にブラジル産が輸入されてから（1-2，地場産業動向②）。しかしこの当時、黄水晶は「其色黄なるを以て黄寶石（トパーズ）」として売られていた（『寶石誌』）。

黄水晶をトパーズと呼ぶ悪習はその後もそのまま、戦後の昭和四十年代まで続いた。従ってその頃までに購入したトパーズの多くは実は黄水晶である。なお、その頃の黄水晶はアメシストやスモーク・クォーツに熱を加えて（加熱処理）黄色にしたものがほとんど。

### 煙水晶、黒水晶（スモーク・クォーツ）

煙褐色の水晶。煙水晶は茶水晶とも呼ばれる。

煙水晶、黒水晶は、近江（滋賀県）、尾張（愛知県）、美濃（岐阜県）などに「良品を産し、多少支那（中国）に輸出す、其価格は水晶より約二割高価なりとす」（『寶石誌』）。

### 紅水晶（ローズ・クォーツ）

淡い紅色をした水晶。

日本では磐城で産出した（『寶石誌』）。だが装身具に用いられてきたかどうかは不明。

## 草入水晶

緑色繊維状の緑レン石、あるいは電気石を含む水晶で、甲斐（山梨県）で産出（『寶石誌』）。

明治四十四年刊の商品カタログ『甲斐物産商報』に玉簪や根掛として紫水晶などと共に「草入」水晶も紹介されている（『日本の宝飾文化史』9B-8）。

## こはく（アンバー）

日本でこはくの玉簪が用いられたのは明治十年頃からである（『日本の宝飾文化史』7C-4）。大正期にはこはくは主に帯留に用いられた。

産地としてはバルト海沿岸地域が有名だが、久慈（岩手県）のこはくも江戸時代からくんのこ薫陸という名称で知られていた。だが大正期頃には装身具に使えるほど良質のものは産出しなかった（『寶石誌』）。従って当時のコハクはすべて輸入品と考えていいだろう。

## べっ甲、擬甲

この時代にはべっ甲の他、「四方張り」と呼ばれた張りべっ甲、「ゴム」とも呼ばれたセルロイドが装身具に用いられた（図1-4-13）。これらは擬甲と呼ばれた。

べっ甲は、櫛、筭、簪に江戸時代中期の今から約300年前から使われている伝統的宝飾素材（『日本の宝飾文化史』3-5）。大正期になっても、べっ甲による櫛、簪、帯留などの和装の装身具や束髪用の櫛や簪がたくさん作られ、その流行は昭和初期まで続いた。

四方張りとは馬や牛の蹄あしを薄いべっ甲で包んだ張りべっ甲のこと。また、卵白を型に入れて擬甲させ周囲に牛爪を薄く貼り合わせた「卵甲らんこう」も使われた。その他、「ゴム」と呼ばれた「セルロイド」も盛んに使われた（セルロイドは後述）。



図 1-4-13  
べっ甲、四方張り、卵甲、ゴムの髪飾り（婚礼用）  
いせ竹小間物店  
大正 5 年 12 月「演芸画報」より  
べっ甲製 80 円より、四方張製 22 円より、卵甲製 12 円より、ゴム製 4 円 50 銭よりと素材により値段が大幅に違う。

## 象牙

象牙は古くからの宝飾素材で江戸時代中期から使われている日本人お気に入り素材『日本の宝飾文化史』4A-4。大正期になっても根強い人気があり、さまざまに彫刻したものが主に帯留に用いられた。セルロイド製の模造象牙櫛も多かった。

## セルロイド

セルロイドとはニトロセルロースに、加工し易くするために可塑<sup>かそ</sup>剤として樟腦<sup>しょうのう</sup>を混ぜた半透明のプラスチック（合成樹脂）。

明治期から「護謨<sup>ゴム</sup>」と呼ばれ、赤く着色したものはサンゴ玉に、べっ甲色に着色したものはべっ甲代用品として、また象牙色に着色したものは象牙代用品として用いられた。なぜセルロイドが護謨と呼ばれたか。はっきりした理由は不明だが明治初期に初めて輸入された頃からセルロイドは誤ってゴムと呼ばれていたようだ。大正期になっても、護謨<sup>ゴム</sup>という呼び名も残ってはいいたが、徐々に「セルロイド」という言葉が一般化した。  
セルロイドは大正初期以降、櫛や束髪髪飾りなど安価な髪飾りに以前にも増して用いられた。

## 模造ダイヤ（ガラス）、模造宝石（ガラス）

セルロイド櫛の上部などには当時「新ダイヤ」と呼ばれたガラス製の模造ダイヤが使われた（図1-2-4）。

模造ダイヤは明治期から装身具に用いられていたが、盛んになったのは大正前期から。新聞記事に「何ととっても櫛も簪も新ダイヤ一方で持切りの有様です。技巧が段々と上手になって光りも本物と變らぬやうに出来ます。小間物類で何が一番流行するかといへば全

く此新ダイヤです」（大正三年八月『都新聞』）とある。また同新聞

には「又近来はルビーやサファイアの擬まがひものが非常な勢を以て流行しました」とガラスの模造宝石の流行についても言及している。

ガラスには何種類かあるが、もつとも多く用いられたのは、通常のガラスよりも屈折率の高い、すなわち輝きの大きい鉛ガラス（フリントガラス）である（『人造品及模造品の研究』<sup>61</sup>）。ガラスに各種の金属酸化物を化合すると模造ルビー、模造サファイヤ、模造エメラルドが製造できる。

模造ダイヤや色ガラスの模造宝石は安価な装身具用素材として大正後期から戦時体制期まで盛んに使われ続けた。

## 七宝

七宝は宝石素材の一種である。

七宝とは銀や銅などの面に窪みを作り、そこにガラス質の色釉薬を埋めて熱し、溶着させて種々の色模様を出す技法（七宝焼）、及びその技法で作ったもの。模様の輪郭に針金を用いたもの（有線七宝）と用いないもの（無線七宝）とがあり、簪の玉などとして江戸末期から明治初期には装身具も用いられた。

有力宝飾店の御木本真珠店では、大正三年に七宝を洋風装身具などに使っている（「鏝のあゆみ」<sup>4</sup>）。

また大正前期には、透明な色釉薬を使ったステンドグラス風の透とう胎七宝（透明七宝ともいう）もあり（『日本囊物史』、束髪簪などに応用された）。

以上が大正前期から使われ始めた伝統的宝石以外の宝石類と宝飾

素材である。だが12月の誕生石であるラピスラズリ（瑠璃<sup>るり</sup>）の製品などはまだ見られない。

時代が時代なので、合成宝石や模造石が混じってはいるが、日本人が愛でた宝石類や宝飾素材は今日思われている以上に多様・多彩であったことが分かると思う。

（コラム1-4-2）

### 鈴木敏編『寶石誌』―必須の宝石書

この項の最後に、ここでしばしば参考文献として取り上げてきた鈴木敏編『寶石誌』を紹介しておく。この本は明治二十二年に、日本最初の宝石専門書『寶玉誌』を出した鉱物学

つなしろう

者・和田維四郎の弟子である鈴木敏（地質学）によって大正五年にまとめられたもの。

その序文に次のようにある。「我國に寶石産出の少なきを恨事とするも、近年寶飾用として外國より寶石の輸入日を逐ふて盛なるには拘はらず、未だ邦文にて寶石を誌せし著書なきを遺憾とし、本年先生の還曆を祝せんが為、其記念として体裁を先生の寶玉誌に倣い、本書を編著し」、宝石愛好家の一助とする。

大正前期の宝石事情を知るための必須の一冊といえよう（昭和四十九年には思文閣から復刻版も出ている）。



鈴木敏編『寶石誌』表紙